湧水

湧水　第十五号　令和六年六月　発行

千代田岳精会　自作自詠俳句研修会

湧水第十五号目次　（五十音順）

作者俳号	名	頁
神田つねこ	（恒子）	1
近藤まき	（まき子）	2
座間萌茶	（文子）	3
鈴木陵人	（重成）	4
徳本じゅんじ	（順治）	5
橋本千舟	（陽一）	6
八田玄猷	（豊）	7
細川をさむ	（修）	8
前田道人	（道紀）	9
自作自詠俳句研修会	実施要項	10
自作自詠俳句研修会	役員	11

「白桔梗」

神田つねこ（恒子）

鉢植のばらの芽赤みひと日晴
人だかりの野路花大根の明り
ツアー写真いよよ出番の夏帽子
老人の日を意識して今日一日
白桔梗五角の蕾ふくらめり
山茶花や散る花びらの夕映へる
ラグビーやトライに歓喜大観衆
つつがなく過ぎし今年の晦日蕎麦

「猛者」

近藤まき（まき子）

飼い猫の利き手は左寒正月
ばら芽吹く子に吉報の届く朝
母あらば被るを見たし夏帽子
どつと来てじつと居座る秋の雷
夏料理かいしきの葉の風すめり
幸せは小さき掌のうち秋うらら
地球にやさしくなんて人間の驕り
ラグビーや猛者猛者猛者の泥と汗

「おぼろ月」

座間萌泉（文子）

霊場に流るる読経涼気かな
おぼろ月外湯巡りの下駄の音
梅雨寒や乳鉢の錆びて大手門
せせらぎのしつらい清し夏料理
吹きすさぶ風にひれ伏す芒かな
沼風や水面に揺るるうろこ雲
山茶花や垣根づたいの曲がり角
石蕗咲くや湧水走るハケの道

「春を待つ」

鈴木陵人（重成）

病む妻の姿凛として年明くる
元朝や海の向うと交はすライン
書初めや一字一字に力込め
春浅し被災の地へと思ひ馳す
到来の越前蟹や夕の膳
てふてふの乱舞擬ひの木の葉散る
山茶花や妻珍しく童唄
春待つやひときは高き鈴の声

「妻」

徳本じゆんじ（順治）

たい焼きや分かちて妻と初詣
啓蟄や孫の進学重なれり
道路道書の伸え今いづこ
遠き日の記憶の中や夏帽子
かき氷妻と楽しむデートかな
散策の妻の姿や秋に入る
秋の夜や竹馬の友と長電話
今日も又妻好物の煮大根

「結髪」

橋本千舟（隆一）

あかときの路地に来鳴くや初鶯
結髪の揺る磬梅開く
池面渡ぐ風にこゆるぎ浅沙かな
炎弦やレトロを並べ露天商
藪枯らし山墅の庭の荒るるまま
李白の詩詰んずる声今朝の秋
朝市や凍抑へて売子立つ
鈍口の余韻の長し寒の内

「米寿の春」　八田玄猷（重）

年賀状今年も送る友をりし
はらからと米寿の春や吾ひとり
シクラメンピンクは妻に我は白
暑さ愛づと痩せ我慢や団扇風
学童保育退職の葉月かな
天地変動名月詠むに暇なく
焼き栗や路地に匂ひの満ちあふる
見慣れたるニット帽やマスクの人

「左義長」　細川をきむ（修）

左義長や燃ゆる炎に子ら赤し
子規庵に日々想ひをり君子蘭
朧月や鴨尾金色と輝けり
姉が駆け弟も後追ふ大西日
雷鳴や土砂降り雨にびしよ濡るる
女生徒に席譲らるる敬老の日
真夜中に「パパ」妻の声
山茶花の花弁散りゆく夕べかな

「命の意」　　前田道人（道紀）

詩歌いのち思いの丈を詠い継ぐ

鉄鉢に氷雨　道路合掌す　南無

破調にも意あふれる初句会

お迎へはお引取りあれ生身魂

地球円　地上に尖る　ガザの塔

釣忍添えた一句が恋をいう

ひめつばき京平野屋にそゝ一輪

結願の道路は雪駄石槌山

自作自詠俳句研修会　実施要領

※　例会　毎月第二火曜日　午後一時より（原則として）

①名句鑑賞・解説（当番制）

②自作自詠

・自作俳句二句の紹介と一句自詠（独吟）

・俳友の感想、先生の句評

③自選一句（新聞俳壇等）、紹介と連者範吟・合吟

④望月の兼題の選定

※　行事　吟行会（原則年二回）、題視会、その他

※　句誌「湧水」年一回発行

自作自詠俳句研修会　役員

参与

鈴木陵人

徳本じゅんじ

運営委員

顧　問　前田道人

リーダー　橋本千舟

サブリーダー　細川をきむ

運営担当　近藤まき、座間萌泉

俳句担当　神田つねこ、座間萌泉

編集担当　細川をきむ、近藤まき

神田つねこ、座間萌泉